
神々の晩餐会

紅瞳 愁桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の晩餐会

【Nコード】

N4613A

【作者名】

紅瞳 愁桜

【あらすじ】

稲妻を司る班長「神崎悠葵」。氷を司る妖刀剣士「神田翔」。重力を司るお調子者「神谷海斗」。風炎を司る天然少女「神藤愛理」。4人の元に、校長から情報が入った。どうやら学校に侵入者がたらしい。学校を守るべく、4人が動き出した。

【序】契りと狂いの桜

校庭の隅で密かに咲き誇る一本の桜。

校舎の陰に隠れている上に、他の木々に囲まれているためか、その桜の存在を知る者は少ない。

十一月下旬だというのにも関わらず、本当に密かに、静かに咲き誇っているその桜の存在を。

契桜

その桜の存在を知っている数少ない者である 神崎悠葵はそう呼んでいた。

そのワケを知っている者は、いない。

その桜の容貌からは「契」という言葉は浮かんではこない。
どちらかというところ「狂桜」。

もしくは「狂わせ桜」という方があっている。

桜自体、季節感が狂っている上に、その桜を見ていると、なぜか落ち着かない気がする……そんな桜だからだ。

【一】お兄さん、お兄さん、朝ですよ

くいいん くおおん くわああん くおおおおん

「相変わらず変なチャイムだよなあ…」

桜の花の下で寝ていた少年がボソツとつぶやく。

桜の花が、全身にまんべんなく降りかかっているが特に気にしてないようだ。

黒い学生服の上に積もっているためか、妙に花の桃色が映える。

「桜姫、お迎えに上がりました」

「……誰が姫だ…」

木の上から突然聞こえた声に、眼を開けることなく、少年が応対する。

「少しは漫才につきあえよ、悠葵」

「………今、眠い…やけ、ヤダ」

寝たまま適当な返事をする。何より今は睡眠が大切なのだ。

よっ、と言っかけ声と共に桜の枝から少年が飛び降りた。
軽やかな身のこなしで音もなく地面に着地する。

そして顔をのぞき込みながら悠葵の体をゆすった。

「お兄さん、お兄さん、朝ですよ」

「……俺に、弟などいない…」

「…パトラッシュー！ 死んじゃヤダよー！」

「……くうん」

ゆっくりと状態を起こし、そのままゆっくりと目を開けた。
眠そうな深紅の眼が、のぞき込んでいる少年の眼を見つめる。

「…んで、海斗^{カイト}。お前は人に犬マネさせて、その後何をしたいんだ？」

「ふっ……秘密だよ」

海斗は、静かにほほえみ、静かに立ち上り、ズボンの裾についた花びらを払い落とした。

払い落とした桜が地面に落ちたと同時に、悠葵がはね起き、その反動を利用して海斗にドロップキックをくらわす。

腕だけの力を利用して放った蹴りにしては威力が高い。

しかし、海斗も負けてはおらず、その足を、円を描くように払い、すっと踏み込む。

そして悠葵の腹に拳を、落下させるように叩き込んできた。

しかし、海斗の拳の落下する力を利用して、身をひるがえし、空中から裏拳を海斗の後頭部に振りかざした。

確実に入ったかのように思われたが、海斗はギリギリの所で上半身を倒して受ける衝撃を弱くしていた。

それでも完全には衝撃を殺せずに地面に打ち伏せられてしまった。

「うわっ！」

「まだまだ青いな…海斗少年よ…」

「いきなり何するんだよ、悠葵」

「うっせー！人の安眠を妨害しやがって…」

「……はぁ……これだから素人は…」

海斗はゆっくり立ち上がると、再び服に付いた花びらを払い落とし、相変わらず桜の花を身につけたままの悠葵を見て、小馬鹿にしたようにふっと笑った。

思わず、悠葵はムツとした顔をする。

「んだよ？ まだ何か用か？」

「別にー？ 用はあるけど用はないー」

「どっちだよ…」

「んなこと、決まってるじゃん！ 国家機密だよ！」

「はいはい、そーですね。んで、用ってなんだよ？」

軽く流されショックを受けた顔をした海斗であつたが、気を取り直し真顔になる。

その表情から、冗談で流せるほどの軽い話ではないことを察しつつか、自然と悠葵の目から笑いが消えた。

場の空気が重くなった。

「実はな…この学校に俺らと同じ、能力者が現れたみたいなんだよ…」

「……その情報は確かか？」

「ああ、確かだ。ルイン氏からの情報だからな…敵は3人らしい」

「あのジジイなら信用なるな…。能力者が3人もか。どうするか…」

ゆっくりと立ち上がると、桜の木に寄りかかった。

その隣に海斗が座り込む。

しばらくの間、どちらも黙り込み、ただ桜の枝が揺れる音と風の吹き抜ける音のみが、場の静寂を破っていた。

風が止み、その場を完全なる静寂が制した。

「……………ゲウ……………」

「って、おいコラ悠葵！ 寝てんのかよ！！」

「んあー？ あースマンー」

「本当に危機感ねえなあ……」

「いや、ちゃんと考えたぞ。アレだアレ！

愛理^{エリ}と翔^{カケル}を誘って一気に撃退作戦で行こうぜ！ これなら確実にしな」

「いつもと変わらねーじゃねーか！」

「いや、違うな。今回は二班に分ける。俺と愛理の 班、そしてお前と翔の 班だ」

「ああなるほど！ って、あんまり変わらねえじゃねーか！

……………まあいいか……………。それじゃあ、速攻で招集&捕縛準備としますか！」

そう言うや否や、海斗は颯爽と駆けて行った。

その姿を見送り、悠葵もゆっくりと後者へと歩き出した。

残された桜が 静かに揺れる

かすかにざわめき 花を風に乗せ 遠くへ運ばせながら

【二】テイクアウトしたいなあ

「え、侵入者？ しかも相手は能力者？ ユー君、それは本当なの？」

「ああ、ジジイからの情報らしいからな、確実だろう」

「そう……。あれ？ それじゃ、カケル君とカイ君は？」

「愛理……話聞いてなかったのか……？」

「……忘れた……」

思わずガツクリ肩を落とす。

あれだけしっかり言っただのにもう忘れたのか……。

俺の努力はドコへ消えたー！ チーズはドコに消えたー！？

凹んだままゆつくりと愛理を見る。

本人はコチラの気持ちに気づいていないのか、脳天気には笑っている。
チクショウ、可愛すぎだぜ……。

「だからな……。しっかり聞いてくれよ？」

簡単に言えば、俺と愛理の班と、海斗と翔の班の二班に分かれるんだよ……

分かったかい？」

「分かった！」

不安だ……。絶対分かってない……。まあカワイイから許すが……。

そう思いながら、愛理を見つめる。

もっとも、コチラの目線に気づかず、準備体操としてラジオ体操をしているが……。

動くたびに、制服のスカートがヒラヒラ動く。

今にも抱きしめたくなるほど、愛らしい。

……敵なんてどうでも良いから、今すぐ愛理をテイクアウトしたいなあ……。

悠葵が危ない思考をしていると、愛理がこちらを向いて微笑んだ。

「はい、準備完了！ それじゃ、行こうよ——！」

「……あいよ……。張り切りすぎて怪我するなよ？」
「大丈夫——！」

……その自信はドロコから来るんだよ……。まあ、何があろうとも俺が守るがな。

心の中で密かに突っ込み、密かに断定した。

気合い十分のまま、ズボンのベルトに、妖刀『黒光^{コクミツ}』を差し、一番怪しそうな理科室を目指して歩き出した。

その後ろを愛理が早歩きで追いかけていった。

【三】一緒にお茶でも

悠葵と愛理が理科室目指して歩き出した丁度その頃、 班 海斗
と翔は既に敵と接触してしまっていた。

「おい貴様ら。なぜに学校へ賊の如く進入した？」

翔の静かな声が響く。

日曜日なので中庭には他に人はいない。

……安心して捕縛が出来るな。

「ワテラ、別ニルインを暗殺シ二来タワケチャイマスワー、コンニ
ショワー」

赤毛の邦人が口を開いた。

……なんだこの中途半端な関西弁は……。

「ソデスヨー。タダ『HARAKIRI』見二来タダケネ」

意味の不明な理由を述べながら、栗毛の邦人（ ）が同意する。

「そうですか。あ、『HARAKIRI』はここではあっています
ん、美しきお姉さん。

それより、一緒にお茶でも……？」

「海斗、貴様は何を言っているんだ……？」

「戯言、だ！」

冷たい表情で、殺気を放ちながら翔がにらむ。

あまりに凄まじい殺気のため、海斗の背に悪寒が走る。

「……貴様、三途の川が見たくなつたのか……？」

「……済まん！ これはあれだ、若気の至り、だ！」

ズボンのベルトに差されている妖刀『白夜^{ハクヤ}』の柄に、翔が手をかけたのを見、慌てて否定する。

翔が柄からゆくり手を離れたのを見、ホッとため息をつく。

緊張がほぐれたところで、さて本題、と二人の邦人を見る。

……それにしても背ー高ーなあ……。
何食つてんだよ……。

翔（176cm）よりも10cm近く高え……。
赤毛野郎ならまだしも、栗毛の美人な姉さんまでそこまで高いとなると、流石に劣等感が……。

「おい、海斗！ 来るぞ！」

そう翔が忠告するや否や、栗毛の女が動いた。
いつの間に持ったのか、その手には鞭が握られていた。

【四】お、俺？

「クタバルナシャイ！」

力の抜けるようなかけ声と共に、女が鞭を地面にたたきつけた。ただ地面に叩きつけたただけなのにも関わらず、中庭の地面に何かで斬りつけたような跡が無数に残った。後の一本一本が結構な深さである。それを見て、翔と海斗が舌打ちする。

「『鎌鼬』の能力者…か…」

「そのようだな…。全く厄介な相手だ。戦いたくはないな。」

このような中距離タイプは倒しにくい。その上、敵の武器は鞭だ。海斗、こいつは貴様に任せた。俺は奥の奴を斬る！」

「へ？ お、俺？」

いきなり厄介事を押しつけられ、目を海斗が白黒させて言う。それを、さも不思議そうな顔で翔が見返す。

「なんだ、何か文句でもあるのか？」

「いや、別にねえけど…」

「なら、さっさと準備をしろ。俺は先に斬りに行くぞ！」

「……」

あきれて声も出ないが、逆らう勇氣もないので素直に従う。と、あることに気づいた。

「おい。捕縛だぞー？ 捕殺と間違えるなよ？？」

「……俺に指図できるのは悠葵だけだ」

当然のように言い切った翔に思わず絶句する。

まあ捕殺しても俺に責任ねえし…。

どうせ忠告聞かねえだろうから、もういいつか。
と言っか、明らかな陣営ミスだろ！

心の中で叫びつつ、諦めたのか、海斗は腕を回し戦闘準備を始めた。

「あーあ…。面倒だけど、まあ頑張りますかね…」

海斗のやる気のない声と共に、二人は弾けるように二手に分かれた。
海斗は鞭から発生する鎌鼬の射程外へと飛び去り、翔はその正反対
女の横をすり抜け、男の方へと走った。

【五】楽しませてもらいますよ

「うおおおおおおお！」

雄叫びを上げながら翔は一気に間合いをつめた。

まるで飛ぶように走っている。

走った勢いを利用し、腰に差している『白夜』を抜き、居合いの如く斬る。

無論、刃を返しているため、斬れはしないが、それでも骨折ものである。

しかし、赤毛の男はいつの間に抜いたのか、諸刃の剣で『白夜』を受け止めていた。

翔の目を持ってしても、敵の抜刀が全く見えなかった。自分の目を疑うが、手のしびれが現実を物語っていた。

「ふ…ジャパニーズソードか。片方しか斬れないとは不憫だな…」

いきなり流暢な日本語で話し始めたと思うや否や、剣で刀を押し返し、刀をひるがえしながら斬ってかかってきた。押し返されたため、少し体勢が崩れそうになる。

しかし、翔はあえて体勢を立て直すために後ろに引かず、刃を返し、前に進みつばで剣を止める。

高い金属音が響く。

「…貴様なかなかやるな。俺は神田 翔覚えておけ！」

「ドウモゴ丁寧…。私は、ジョナサン・ドーベル。以後よろしく願います……。」

まあアナタはここで死ぬので関係ありませんがね…」

「それはどうか…？」

声と共に、翔を中心として気温がどんどん下がっていく。
秋とは言え、異常な寒さにどんどん変わっていった。

「ふっ、アナタの能力者ですか。…楽しませてもらいますよ」

嬉しそうな顔をしながらジョナサンがささやいた。
彼もまた、霧をまとうように霞み始めた。

潤い冷えた、異様な空気がその場を支配する。

【六】全然違うぜ

場所同じくして、海斗と女がにらみ合ったまま静止していた。

と、海斗が腰を低くしたかと思うと、矢のような早さで女に突っ込んでいった。

海斗が動くと同時に、女はすかさず鞭をかざすと、勢いよく振り抜いた。

空気を裂く音と共に、鞭が海斗を襲う。

寸前のところで回避するが、鞭が地面を叩く直前に鎌鼬が発生し、海斗に向かって飛んできた。

バランスが崩れているために、回避するコトは出来ずに両手を目の前でクロスし、腕でうける。

ガードしても勢いは全く衰えず、制服を刻まれながら海斗はぶっ飛んだ。

中庭の地面を10mほど滑り、やがて止まった。
一面に砂埃が立つ。

中庭は、風が吹き抜けにくい所にあるのでなかなか砂埃が収まらない。

砂埃のため、海斗の様子が女には全く分からなくなってしまった。

女は焦れっなくなり、鞭をメチャクチャに振り回し、砂埃舞う所に鎌鼬を発生させまくる。

しかし、風を切る音のみしか聞こえず、全く海斗に当たっている気配がない。

と、砂埃が一気に消えていった。

いや、吸い込まれるようにその規模を縮めているようだ。
砂埃が吸い込まれた先には……海斗がいた。

両腕から血をしたたり落としながら両手を下げている。
右の拳の先には、砂の塊のような球体が宙に浮いている。

どうやらそこに向かって、砂埃は吸収されていつているようだ。

全ての砂埃が吸収されると、海斗はゆっくりと右手を前につきだした。

そして静かに腕を引くと、一気に殴る動作をする。

すると砂埃が固まった球体が一直線に女に向かって飛んでいった。

唐突な反撃に、横に転がるようにして回避した女の上を、砂埃の球体が飛んでいき、校舎に当たった。

凄まじい轟音と共に、砂の球体は弾け、直撃したところには大きな傷が出来ていた。

「…砂使イデスカ…？」

「ノウ！！ 全然違うぜ、クレア「アントワネットさんよお！」

海斗の声に、女はピクツと反応した。
その顔には驚きの色が浮かんでいた。

「ナ、ナゼダ！？ ナゼ私ノ名ヲ……！」

「普通自分の名刺を任務中持つか？」

慌ててクレアは自分の胸ポケットを触る。
そしてクレアの名刺をヒラヒラさせながら笑っている海斗をにらんだ。

【七】神！そしてゴッド！

「貴様アア！！」

「おー怖っ。だがな、絶対俺には勝てないぜ」

余裕の表情を浮かべ、海斗はウィンクをしてみた。
クレアは髪が逆立つほど、怒りをあらわにした。

そして、腰のベルトからもう一本、ゆつくりと鞭を取り出し、左手に持つ。

「ほお…二刀流ならぬ二鞭流ですかあ！！……微妙ですよ、美しきお姉さん？」

「オオ、何言ッテルカ、私分カリマセーン E x c r e m e n t
B r a t t ! ! (クソガキ！)」

「残念ですよー。俺、英語分かるんですよ 何せM r . 帰国子女！
それじゃあ… F U C K O F F ! (消え失せな！)」

「…… S H U T U P ! (黙れ！)」

「へへ。そろそろ本気で行かせてもらっぜ……」

そう言つて、地面を強く蹴り、一気に間合いを詰めた。

悠葵や翔には劣るものの、その凄まじい跳躍力と早さにクレアは目を見開いた。

両手の鞭を振るうまもなく、海斗がふところに潜り込んできたのだ。

「美しき女性を殴るのは気が引けますが……」。

すみません、やらないと翔に殺されるんです……」。

D e a d o r A l i v e (生きるか死ぬか……)。

なんちゃって」

無駄に長々としたかけ声と共に、クレアの腹部に拳をたたき込む。女性相手なので、本気と言いつつも軽くたたき込んだ。

だが、クレアは小さなうめき声と共にうずくまってしまった。冗談ではなく、本気で平伏されたようである。

「ウ…コレハ一体…！？ 体ガ重イデース…」

「だろ？ 女性の味方の俺は、女性を傷つけることなく捕縛出来る最高にナイスな紳士だ！」

「マ、マサカ…。砂デハナク、重力使イデスカ！ SHIT！（クソッ！）」

「はーっはっはは！ 捕縛成功！ 流石俺！ まさに神！ そしてゴッド！」

はーっはっはは！ それじゃ、さっさと終わらすとするかねー」

そう言つて静かにクレアの元に近づき、その首に手を添えた。そして優しく微笑むと、目をつぶった。

「それじゃあ…おすみなさいませ」

声と共にクレアは気を失った。

どうやら海斗が、小さな重力球を首に放ったようだ。

「ハ…疲れたし、見張り兼で、ここでサボっておこうつと」

そう言つて、気を失ったクレアの横に寝そべる。そして静かな寝息を立てだした。

その上空を桜の花びらが飛んでいった……。

クレア¨アントワネット VS 神谷 海斗

勝者 神谷 海斗

【八】氷月来来

霧と冷気に包まれた空気が、翔とジョナサンのお互いの感覚を麻痺させていた。

双方とも微動だにせず、感覚を限界まで高め、相手の気配を探っている。

下手に動けば、最悪、居場所がばれてしまため、あくまで微動だにせず。

視覚も嗅覚も奪われたこの状態では、聴覚だけが頼りなのである。

このままだとラチがあかないな……。しょうがない、やるか…。

そう翔は決意し、ゆつくりと『白夜』を構える。

それは斬ったり突いたりするための構えではなく、刀身を起こし、天を突き上げるような構えであった。

「……ヒョウゲツライライ
氷月来来」

『白夜』の刀身に集中し、静かに唱える。

無論、どんなに接近していても全く聞こえはしないほど静かに、である。

唱え終わると同時に、場の空気が更に冷え、『白夜』が凍った月を思い起こさせるような色に変化し、かすかに光を放ち始めた。

「……アマツミツ
天氷柱」

白夜の柄を強く握り、静かに唱えると、天を突き上げるように素早く刀で空を突いた。

空気を裂くような音と共に、身の丈並の氷柱が無数に降ってきた。翔の現在地とは全く異なるところからの音であるから、コチラの居場所にはばれない。

それに、これではジョナサンも避けられはしないだろう。しかし、一応追い打ちをかけておく。

「ツツツ土氷柱」

コチラは無動作で、唱えた。すると、地面から天氷柱による氷柱ほどの大きさの氷柱が突きだした。

天からと地からの挟み撃ち。これでは回避のしようがないはずだ。死んでさえなければ、最高である。

何にしろ、最低、敵は気を失っている予定なので、静かに『白夜』を鞘になおした。

【九】俺の死に場所

「やれやれ。これで終わったな…。早々と悠癸の所に行くか…」

そうつぶやいて、翔が歩き出そうとした瞬間、背後から声がした。

「まだ行かせはしないよ？」

その年齢であれほどの技をだせるとは、君はただ者じゃないね」

「まだ生きていたのか…。俺の連技を切り抜けるとは貴様もただ者ではないな…。」

全く、いつになればくたばるのかと…」

「まだまだ行きます、氷の侍よ！」

「…来い、霧の剣士！」

そう叫ぶなり、翔は振り返り際に『白夜』を横一文字に振り抜く。しかし、ジョナサンも負けては居らず、剣で受け止めた。

「剣ごと凍らしてくれるわ！」

『白夜』の刃が輝きを増し、場の空気が急速に下がる。

秋なのにもかかわらず、極北よりも気温が低くなっていた。

しかし、翔の思惑どおりにジョナサンの剣が凍ることはなかった。さらに『白夜』の温度を下げるが凍らない。

「ふつ、驚いているね？ 凍らないのは当然さ。」

我が聖剣『聖霧』（HOLY MIST）は妖刀の邪気を払う。

そのジャパニーズソードは妖刀だね？」

ジョナサンの言葉に、思わず舌打ちをする。

「…そう言うことか…。だがっ！」

そう吐き捨てるなり、剣を薙ぎ払いつつ、左足を踏み込んで、右下から斬り上げる。

流石のジョナサンもこれは防げず、後ろに飛んだ。

しかし、ジョナサンが着地する前に、更に間合いを詰め、左肩へ刃の峰をたたき込む。

肩を押さえようとするジョナサンの腹部に氷をまとった右拳をたたき込んだ。

小さなうめき声と共に、ジョナサンは気を失った。

翔は、その横に静かにたたずみ、しかし肩で息をしている。

「貴様がいかなる者であろうと、俺とアイツとの間を拒める者はいやしない…。」

アイツは俺を倒した唯一の男だから…。アイツの傍が俺の死に場所だ……！」

何げに危ない言葉を吐きつつ、『白夜』を鞘に納め、ジョナサンの両手首をベルトで締めた。

気を失ってはいるが、これほどの者はいつ目を覚ますか分からないため、一応動きを封じておくのである。

予測どおり、すぐにジョナサンが目を覚ました。

「う…。思ったより動きが早く、私でさえ捕らえられなかった…。」

しかし、まだまだコブシの入りが甘いですよ…。あの程度じゃ決定打にはなりません」

「…目を覚ましたと思えば良く喋るやつだ。…俺は主に刀しか使わ

ない。

だが貴様がそう言うのなら仕方ない。悠葵に教わるか…」

「ははは。余程悠葵さんのことがスキなんですネ」

「…っ！」

思わず、爽やかにほほえむジョナサンをにらむ。

しかしジョナサンは全く笑顔を壊さない。

その姿を見、長いため息を翔は吐いた。

「俺は、奴を尊敬しているだけだ。勘違いする奴が多いが…」

「ハハハ…」

その笑顔のまま、静かにジョナサンは眠りに落ちていった。

あまりに体力の消費が激しかったためか、安心したためかは定かではないが。

刀をベルトから抜き、地に座り込んでジョナサンを見張る。

翔はそのまま、眠ることなく瞑想状態へと入っていった。

そんな二人を、桜の香りを運ぶ風が撫でていった…。

ジョナサンⅡドーベル vs 神田 翔

勝者 神田 翔

【十】置いていくよー

翔の勝敗が決した頃、まだ 班 悠葵と愛理は校内をさまよっていた。

怪しいとにらんでいた理科室はモヌケのカラであり、図書室、調理室、木工室、パソコン室、音楽室、e t c . . .
とりあえず、あらゆる部屋は捜したが、どこにも敵の姿を確認できなかった。

流石の二人も少々うんざりしていた。

「……ねえ、ユ一君。ひょっとして、もう敵さんいないんじゃないかなあ？」

「え？…まあ愛理がそう言うなら居ないかもなあ」

愛理のかわいさに思わずうなづいてしまう。

こんな悠葵の姿を見たら翔は悲しむだろう。恐らく。いや、絶対に。そんなことは思いもせずに、にこやかに愛理を見つめ続ける悠葵。

「でしょ？ 何にしてもちよつと休憩しない??

屋上で風に当たりに行こーよー？」

「良いね！」

明らかに何かを企み、いかにも嬉しそうに悠葵が答えた。

そんなコトはツユ知らず、はしゃぎながら歩いていく愛理の後ろ姿を幸せそうに眺める。

「何してるのー？ 置いていくよー？」

「ああ、今行くぞ」

駆け足で後を追いかける。

そして、そのまま競うようにして屋上へと駆け上がっていった。

「ははは、まだまだ愛理には負けないよ」

肩で息をしている愛理を見つめる悠葵の顔は、子どものように無邪気である。

彼らに言わせれば16歳は十分大人だといつかかもしれないが…。

「相変わらず足速いねー！ 全然追いつけなかったよー！」

「大丈夫！ すぐに追いつけるようになるさ……」

ただならぬ気配を察知して、言葉をきる

【十一】雷霆来

気配をたどって前を見ると、屋上のちょうど中心に、茶色のロングコートにその長身を包んだ男が腕を組んで立っていた。

男から10メートルほど離れているにも関わらず、相手の殺気がコチラまで伝わってくる。

「残念だね、愛理。とうとう発見してしまったようだよ……」

「みたいだねー。どーしよ?？」

殺気が手に取るように分かるほど放っている男を前にして、のんびりと考え込み始めた。

典型的な動作　掌にコブシを軽く叩きつけて悠葵が目を開いた。

「そうだ！　捕縛しようっ！」

「うんっ、そーしよー！」

そして、静かに男を見すえ、悠葵が愛理の前に立つ陣営を組み、身構える。

いつでも抜刀できるよう、『黒光』の柄に手を軽く置く。

「東洋剣士と炎の魔術師ですか。厄介ではあります、が……」

渋い声でささやいたかと思うと、男はいきなりコートの中からサイレンサー付ハンドガンを二丁取り出し、フルオートで乱射してきた。

多少は予測していた事態であったため、その場を動くことなく、流

れるように全ての銃弾を斬り落とした。

静かに男を見すえたまま、悠葵は刃先を下に向ける。

「レイティンライライ
…雷霆来來！」

勢いよく唱えると、刀を点にかかげあげた。

みるみるうちに、『黒光』の刃が青白いかすかな光に包まれていく。

「俺はただの剣士じゃねえ！ ライティ
雷霆剣士だ！
てめえの情報に追記しなっ！」

そう言うなり、悠葵は『黒光』を横一文字に振る。

距離があるにも関わらず、何を思ったのか男は回避した。

すると、先程まで男がいた場所一帯に青白い稲妻が落ちた。

「雷剣士ですか…。かなり厄介ですね…。しかし、私が負ける要素は全くありません。

それでは、コチラからも行かせてもらいますよ！」

そう叫ぶと、男は目を伏せて、呪文スベルのようなモノを唱えだした。

「この世に生を受けし万物の精霊たちよ。我に彼の者の四肢の自由を奪う力を！」

自由を奪う鎖（Blockade Chains）！」

不意に悠葵の両手両足が、鎖を巻き付けられたように重くなった。

霞下段の構えをとり続けるだけで精一杯になってしまう。

歯を食いしばる悠葵の顔を、心配そうに愛理がのぞき込む。

「だ、大丈夫、ゆう君！？」

「ああ、大丈夫だ。こいつは『呪』使いな。呪文で精霊を操り、敵を攻撃させるんだ。」

俺との相性最悪だぜ。と、言うか絶対、今日の魚座の運勢最悪だ。

┐

ボヤクが状況は変わらない。

どうやって戦況をくつがえそうか考えていると、いきなり愛理が動いた。

【十二】朱雀来

愛理が不意に顔を上げ、男に一ベツをくれると、短く唱えた。

「槍^{ソウ}ッ！」

すると、無数の火炎槍が発生し、男に向かって勢いよく飛んでいった。

やむおえず、男は呪いを解き、後ろに飛ぶ。

そして間をおかず、今度は愛理に呪文を唱える。

「この世の音と動を司る精霊たちよ。

我に彼の者の自由と声を封じる力を！

影法師の谷底（Bottom of a Shadow Ravine）！」

小さな悲鳴と共に、愛理は動くことも声を出すことも封じられてしまった。

代わりに鬼人の如く怒っている悠葵が自由になる。

「てめええ！ 絶対え許さねえ！ ブツ殺す！」

体中から青白い電流を放ちながら、悠葵が男に突っ込んでいく。

あまりの速さに、彼の自動には青白い光と共に残像が残っている。

男が放つ銃弾が数発当たるが、前進は全く止まらない。

霞下段の構えから、鋭い突きを男に放つ。

その突きを避けてハンドガンで反撃しようとする男の右手を『黒光』の峰で力一杯叩く。

風を裂く音と共に、グランドへ右手のハンドガンが落ちていった。

そのままの勢いで重心を移動しつつ、左手に回し蹴りを放つ。
左手のハンドガンも同様にあっけなく落ちていった。

さらに回し蹴り時の軸足の回転を利用し、刀の柄を鳩尾にたたき込む。

しかし、男は後ろに軽く飛び去り、鳩尾への攻撃の威力をほとんど抹消した。

攻撃範囲外に逃げられ、悠葵は再び霞下段の構えに戻した。

悠葵の願いどおり、今の戦闘のおかげで愛理の呪いは解けたようである。

間をおかず愛理がその口を開けた。

「スザクライライ
朱雀来来」

静かに唱えると、愛理の周りを灼熱の風が包み込んだ。
その目には、静かな憎悪の炎がかいま見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4613a/>

神々の晩餐会

2010年10月8日21時35分発行